

好きな人のせいでよく泣いている

奨励	川江 友二〔かわえ・ゆうじ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団豊中教会伝道師

さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。
「貧しい人々は、幸いである、
神の国はあなたがたのものである。
今飢えている人々は、幸いである、
あなたがたは満たされる。
今泣いている人々は、幸いである、
あなたがたは笑うようになる。
人々に憎まれるとき、また、人の子のために追ひ出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。
この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。

(ルカによる福音書 6章20—23節)

涙を流す経験

先ほど、ご紹介をいただきましたが、私もこの京田辺キャンパスで1、2回生のころ、大学生活を過ごしました。ここに久しぶりに戻って来ることができ、とても嬉しく思っています。また、ここでお話をさせていただくこととなり、大学生活での多くのことを思い出し、感慨深い思いを感じています。
そうように大学生活を振り返り、思い出したのは、しばしば私が涙を流した経験でした。とは言っても、大学生活が辛いことだらけで、泣き通しだったというわけではありません。楽しいことも、笑ったことももちろんありました。しかし、一番に思い出すのは、一人で、あるいは誰かの前やみんなの前で、涙を流したことです。
皆さんはどうでしょうか。皆さんのなかにもよく泣いているという人もいれば、涙はめったに流さないという人もいでしょう。泣く、涙を流すということに対しての受け止め方は人によって違いますし、人前で涙を流すことは恥ずかしいこと、ダメなことと考える人もいるのではないのでしょうか。しかし、人は泣きながら生まれ、その後も涙を流さずに生きていくことはできないはずです。人は必ず涙を流す存在なのです。
かく言う私は、先ほど申しましたように、大学生活ではよく涙を流してきました。そのときのことを2点ほど、お話ししたいと思います。

失恋の涙

涙について、大層なことを言っておいてなんですが、1点目は失恋したときのことです。私は大学に入る前から付き合っていたパートナーがいたのですが、大学2回生のときに別れました。あのときはショックでした。別れを告げられたとき、息がつまりそうになり、動揺して「どうしよう、どうしよう」とうろたえるばかり。その後、少し落ち着いて、「ああ、ほんまに別れたんや」と思うと後から、後から涙が出てきました。そのとき私は友だちを頼って、よく話を聞いてもらいました。このキャンパス内でも、学食や学食前の広場などでため息をつきながら、話をしたことを思い出します。友だちに話をするとまた別れたことを現実のものとして思い出し、涙が出るのですが、そうした気持ちを隣にいて「うんうん」と聞いてくれる友だちに話をしていると、随分とすっきりするのです。友だちだけでなく、飲み連れで行ってくれる牧師もいました。牧師や友人と教会で飲んだり、京都の鴨川で春先寒さに震えながらお酒を飲み続けたりして、ものすごく気分が悪くなったことも覚えています。私は辛いことがあると、いつも人に頼ります。特に親しい友だちには何度も迷惑をかけてきました。それほど、私は弱くて、悲しいとき、辛いときには人に頼ってばかりいます。
またその失恋のときには、そのショックの大きさから友人だけでなく大学の先生にまで相談していました。それは神学部の若い西村篤先生という方で、ちょうどそのとき私が西村先生のS A（ステューデントアシスタント）をさせていただいていました。西村先生は神学部赴任2年目で、授業を行うのはその年が初めてでした。私は、当初その授業を聞きながら「やっぱまだまだベテランの先生の方が授業はおもしろいなあ」なんて、生意気に思っていたのです。しかし、先生はとにかく熱心でした。授業はもちろん、それ以外でも、いつも学生一人ひとりに声をかけ、大学にしばらく来ていなかった学生を見れば「どうしたん、研究室においで」と言って、みんなのことを思いやってくれる。そんな温かな人柄から、私は先生を慕うようになり、将来のことや勉強のことなどを相談し、先生はいつも私の気持ちに寄り添って、アドバイスをくださいました。忙しいなか、何時間も時間を割いて、おまけにいつもキャンパス内にあるアマーク・ド・パラディに行って、お茶とケーキをご馳走になりながら、話を聴いてもらっていたのです。失恋の話はさすがに言い出しにくかったのですが、先生の誠実さと温かさに甘え、友だちの勧めもあって、私は話をしたのです。すると、先生の親身な姿勢と言葉、そのとき先生は、「予言するんだけど、それは10年先も辛いよ」とおっしゃいましたが、そういった言葉に私は心を少しざわめかしつつも、一つ一つの優しい言葉と態度に心を落ち着かせることができ、楽になったのです。

もうひとつの涙

そうした矢先に新たな別れがやってきました。
それは大好きな西村先生の突然の死でした。先生はいつも優しく、温かく見守りながら私に今を、そしてこれからをどう生きるかという指針を与えてくださっていた方でした。ですから、私は突然歩く道を失ったようで、どうすればいいのかわからなくなってしまったのです。あまりの突然なことに、「なんでや！先生を返してくれ！！」というやり場のない悲しみ、怒り、憤りで気持ちがいっぱいになりました。悲しくて、悔しくてたまらなかったのです。神さまに腹立たしい思いがしました。
私の二つ目の涙の記憶はこの恩師の先生との別れでした。あれから5年7カ月が経ちましたが、今でもこのときの記憶と気持ちは色あせることなく残っています。
この出来事の後もうっぱり私は人に頼りました。友人を頼り、家族を頼り、牧師を頼りと、本当に多くの人を頼ったのです。先生の訃報を電話で受けたとき、私は教会にいて、一人外で泣き崩れていました。しかし、一緒にいた友人が近づいて来て、声をかけてくれました。夜9時ぐらいから深夜3時ぐらいまで泣き続けていましたが、牧師は最後まで側にいて、一緒に祈ってくださいました。やっぱりこのときも一緒に泣いてくれる人、話をずっと聴いてくれる人がいて、その一人ひとりに支えられました。そのように、話を聴いてもらうなかで、西村先生が私に何度も語り、このキャンパスで行われたチャペル・アワーでも語ってくださっていた「出会いはいつもの力を超えた力によって与えられている。人は出会わされている」という言葉を思い出し、私とその先生との出会いも、確かに神さまによって与えられたものだった、納得はいかない、意味も分からないけれど、別れもまた、神さまによって与えられたものだったと少しずつ思えたのです。その上で、今、神さまもきっと涙と一緒に流してくれていると感じられたのです。

今生きている

わたしたちへ

今日の聖書箇所には、「今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」（ルカによる福音書6章21節より）と記されています。今泣いている人、あるいは苦しくて悲しくて叫ぶように泣いている人にとっては、「こんなことを言われても」と思います。「ふざけるな」と。しかし、落ち着いてよく読んでみると、ここには今泣いている「人々」、そして「あなたがたは」となっています。ここでは、泣いている人はみんな、というのではなくて、泣いている人は独りではない、と理解できるのではないのでしょうか。今泣いている人々は「共に」泣いているのです。人の哀しみを心から分かり、共有するとき、「辛さ」は、共に泣く「一」人が加わって「幸い」となるのです。また『動詞人間学』（作田啓一・多田道太郎 講談社 1975年）という本には、哀しみについて次のように書いています。「哀しむとは人間の感動の根本である。そこから同じ『かなしむ』でも『悲』（なげく）と『愛』（いとおしむ）とに分化する。『悲』と『愛』とはどこまでもつながっている」と。誰かと共に悲しむとき、それは愛につながるのです。共に悲しむことは愛することになる。そして、共に悲しむのは誰かという、それこそがこの聖書の言葉を語ったイエスに他なりません。イエス自身が居場所なく馬小屋に生まれ、傷ついた人と共に生き、十字架の道を歩みながら、誰よりも傷つき、悲しみ、また愛されたいと願っているからです。そして、イエスもまた、自身が涙を流すことを通して、悲しむこと、泣くこと、そして思い悩むこと、取り乱すこと、弱音を吐くことが悪いことではないこと、イエスという友と一緒にいてくれることを、今を生きているわたしたちに伝えてくれるのです。
詩人であり、絵本作家でもある工藤直子さんという方の「海の はじまり」という詩をご紹介します。

ひとはみな
心のなかに
海をひとつ もっている
その 濃いみどりの海のうえに
ときどき ちいさな魚がはねて
ときどき ちいさなしづきがたつ
ひとの心のなかに
いつ 海はうまれたか
おそらく むかし

——なにが悲しいのか
わからないほど ちいさく
なにがつらかったか
忘れてしまうほど むかし
ひとはみな
はじめてまるい口をあけて泣いた
あのときの涙の粒が
海の はじまり
泣くたびに流れた
塩からい涙は
だれにも知られぬ場所に
あふれあふれ
——それはたしかに 悲しみの波
それはたしかに つらさのうねり
それはたしかに そうなのだが
ごらん いつのまにか
涙の海に 生まれてそだった
泳ぐものたち
笑い 歌い そして遊ぶ
泳ぐものたち
ひとはみな いつだって
塩からくて にぎやかな
海を 抱いて いるのだ

(工藤直子『ともだちは海のおい』理論社 2004年)

海の先には

今も私はさまざまなことで泣くことがあります。特に今も好きな人、私の連れ合いが長年患い、どんなに願ってもなかなか良くならないうつ病の病状のことなどで、悲しくて、悔しくて泣くことはしばしばです。それでも、そのことをすべて私が働く教会などで明かすと、思いを分かち合ってくれる多くの友との出会いがあり、一緒に泣いていてくださるイエスとの出会いの再発見があり、私は生かされています。

今、大学生の皆さんはこの大学の中であるいは外で、多くの出会いがあると思います。そこでは、きっと多くの喜びがあることでしょう。その一方で、涙を流す経験もあると思います。もうすでにそのような経験をしてきた人もいることでしょう。辛い経験、苦い経験、悲しい経験を経て、涙を流してできた「海」をそれぞれが生み出し、もっています。なかには、人前で涙を流すことがためらわれ、心に涙を染み込ませて歩む人もいるでしょう。そうして作られた「海」を人は泳ぎながら少しずつ、少しずつ成長していく。それと同時に、涙を流すとき、必ずイエスがその思いを聴いてくださっているのです。しかし、自分が涙を流しているときには、そのことになかなか気付けないものです。おそらく、それに気付けるのは、思いを聴き、時に涙を共に流す誰かと出会うことによって、だと思います。ですから、少しだけ勇気を出して、辛いとき、誰かの前で弱音を吐いてください。取り乱してください。泣いてください。独りではありません。時に応じて、思いを分かち合ってくれる人、イエスとの出会いは与えられます。そんな友と出会うとき、あなたもきっと誰かと共に悲しむ人、愛することのできる人になれる。今、泣いていても、いつか一緒に笑えるようになると思うのです。これからの出会いと涙、一つ一つを大切に生きていきましょう。

2013年6月26日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録